



先日、(公社)関西シルバーサービス協会主催の研修において、森ノ宮医療大学 保健医療学部 作業療学科 横井賀津志氏より「認知症の方に対するリハビリテーション」についてお話を伺いました。その中で、**認知症の方へアプローチする際のポイント**の1つとして、「**その人を作業でとらえる**」というお話を伺いましたので、ご紹介いたします。



作業とは？

食べたり、入浴したり、人の日常生活に関わるすべての諸活動を「作業」と呼んでいます。(一般社団法人日本作業療法士協会HPより)

横井氏のお話では、作業 (Occupation)とは、経験を伴う活動であり、同じ「食べる」という行為でもその人(個人)によって意味が異なる、という事でした。

例えるなら、Aさんにとっての「食べる」は「料理を味わう楽しみを得る場」であり、Bさんにとっての「食べる」は「人とのコミュニケーションをとる場」である、というように、個人が「食べる」事に対して見出しているものが異なるという事です。

そうした中で、横井氏は「作業」とはその人(個人)を形成する程占める割合が大きいもの、と定義されていました。

その人(個人)を作業としてとらえる

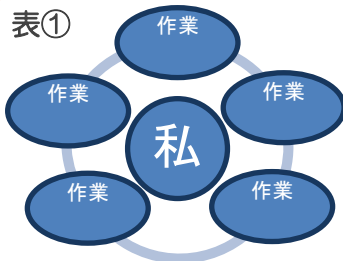
その人(個人)を作業としてとらえる、とはどういう事なのか、横井氏はそれを「その人(個人)を作業で表現する事」だとお話されました。

まずは実際に自分を「作業」で表現してみましょう。初めに、自分が生きていく上で「これだけは必要だ」又は「毎日欠かさずにやっている」という事柄をピックアップしていきます。年単位でも毎日の事でも構いません、趣味や日課など出来るだけたくさんピックアップして下さい。それが自分(私)を形成する「作業」です。次に下記の表①にピックアップした「作業」を埋めていきましょう、「作業」によって自分(私)が表現されます。

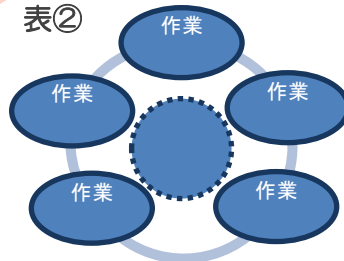
表②は認知症によって自分(私)を見失った状態です。認知症では、脳の細胞が壊れることにより記憶障害や見当識障害(季節や時間、今いる場所や人がわからなくなる等)、理解・判断力の低下、実行機能の低下など「中核症状」というものが起こります。そして認知症を発症した多くの方が、自分が自分でなくなるような、自分を見失う不安にさいなまれます。横井氏は、そのように自分を見失った場合でも、表②の様に自分(私)を占めていた「作業」を取り戻せば、自分(私)が浮かび上がってくる、と考えておられます。これが「その人(個人)を作業としてとらえる」、すなわち「作業」からその人(個人)へアプローチするという事です。

ただし、**認知症の方は、自分で「自分を形作る作業」を語ることができません。その人(個人)を語れる代弁者(家族、友人、身の回りの人など)がキーポイントとなります。**

表①



表②



「私」を見失っても、「私」を形成する「作業」を取り戻すことで、「私」がうかびあがる。

作業からのアプローチ

実際に「作業」からその人(個人)へアプローチした例として、横井氏は、ある施設入居者の女性についてお話し下さいました。

「お風呂がとっても嫌で拒否する鹿児島出身女性の例」

当初、お風呂を嫌がるこの女性に対し、施設では入浴工程の見直しを行ったり、「一番風呂」や「温泉の入浴剤」などで、入浴への意欲を引き出そうとしましたが、中々成果を得ることができませんでした。

そこで横井氏は、その女性へ「作業」からアプローチすることを提案されました。まず、家族などから本人の経歴を出来るだけ詳しく聞き、「作業」を集める事により、その女性が「一家の大黒柱を守るために、早朝から深夜まで家事に明け暮れる、家族の満足が自身の満足であると考え人」であると分かりました。そして次に、その女性にとって、お風呂という「作業」がどんなものであったのかを下記の様にまとめられました。

その女性は、話し言葉を理解することはできたので、上記でまとめた結果をふまえ「お風呂最後で悪いけど、入って」と誘うと、入ってくれる事が増えたそうです。

	作業の形態	作業の意味	作業の機能
いつ	家族全員が入った最後	●一日が無事終わった安堵感にひたる。 ●家族の一員であるという自覚 ●自分よりも家族に感謝	不健康な生活リズムに感じ取れるが、彼女にとっては役に立つことが使命であり生きがい
どこで	暗がりの中		
だれと	一人きりで、みんな睡眠中		
どのように	ぬるま湯で、湯量も少ない		

※研修会資料:『認知用の方に対するリハビリテーションと認知症予防のための戦略』より

その人(個人)が持つ「作業」の意味合いを理解することで、その人(個人)を理解し、アプローチを行うことが可能になります。